
なんでも屋 武道

Missty

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんでも屋 武道

【Nコード】

N8709C

【作者名】

M i s s t y

【あらすじ】

軍隊家族に生まれた一人娘の『雫』就職が決まらず迷っていたところにあるひとつの何でも屋が目にとまった

プロローグ（前書き）

軍事専門用語は文章の最後に
注意書きとして書いてあります
なお、グロテスクな表現がありますので
好きでない方は今すぐ退出願います

プロローグ

「ふみゆう」

高級羽毛布団にくるまり、寒さから逃れている女性が一人いた。
今は10月の秋になりつつある季節

蚊に悩まされる日々はもう過ぎたころ

一階の和室に敷布団を敷きその寝姿は誰もが魅了するだろう。
しかし

アスファルトの上を台車が走る様な音と共に雨戸が開けられる。
一枚づつ

開けられた所から、陽射しが入り女性は陽を背にして転がる
和室には人は彼女一人しか居ない
外から開けられたらしい

「まぶしいよう」

彼女の名は武宮雫たけみやしずくばりばりの18歳である

「ほら、起きなさい雫」

朝食を準備する若き女性

雫の母である殺せつな

「ふあい」

目を擦りながら起き上がると、ネグリジェと…あとは察してほしい
姿だ

「まったく、ズボンぐらいはきなさいって言ってるでしょ」

呆れたように腕を胸の下で組みいい放つ

（私は貴方の胸の大きさに感服ですよ）

なんでお母さんに似なかったんたろうと、考えながら自分の胸を両
手で押さえる

母は見てみぬ振りか大きい胸を見せ付けるようにキッチンに戻る
今日のモーニングは洋風のようなだ

しかし、フォークはあるがナイフがない

「お母さん、ナイフないよ」

「あら、そうだった？はい」

その瞬間ナイフが彼女の眉間向かって飛んできた
それに反応し右手指二本でナイフの持ち手を掴みとっていた

「お、お母さん！物は投げない！」

危険な行為に対し注意する娘に対し母親はと言うと

「あら、ごめんなさいね。つつい」

おっとりした声で許しをこう

「もう」

いつもの事になっていた

そう、最初は小さい幼稚園中年児の頃だったろうか

始めはピコピコハンマーが飛んできた

小学生になる頃にはナイフになり、2年生になった頃には何処かし
らない施設で夏休みを過ごし（この頃には銃を初めて撃った）

中学校のこの頃は湾岸戦争にもお母さんと一緒に行ったこともあつ
た（ここで初めて銃に撃たれた）

最近は施設には年1回1週間通っている

ちなみに、その施設がアメリカCIA工作員や陸軍特殊部隊などを
育成する施設だと気付いたのは高校1年の頃、もうその時は逆に教
官をやらされていた

ここまでで母の元職業が分かった人マニアね、母の元職業はアメリ
カ海軍特殊部隊長

いわゆるネイビーシールズのトップにいた人で、もう退役して傭兵
まがいをしている

お父さんと言うと初めて参加した湾岸戦争のとき空の藻屑となつ
て消えた

何時かそうなるとは思っていてもショックは大きかった

撃ち落とした敵部隊をお母さんと私で壊滅させた

初めて人を殺したのもこの時が初めて

グチャグチャになるまで敵指令官の顔を撃ちまくっていた私を止め

たのがお母さん

そのあとは、きつと泣いていたと思う

その後ことは記憶があやふや

あ、これだけ覚えてる

フセインのほほを殴り飛ばしたのが私

映像が報道されたときあとが残っていた

その時、思った事が

（腹にしておけばよかった）

だった気がする

そして、いま私は高校を卒業して：

大学には行けなかった

なぜかって？

夏休みは戦争に土日はお母さんの稽古

勉強する暇なんかないよ！ああ、私に青春をかえせえ

「どうするの？就職」

心配そうにいうお母さん

のはずなんだけど、何故かうキウキしている

【何故！】

「適当に探すよ」

適当に答えるが

「履歴書どう書くの？」

うっ

「面接で親の職業聞かれたら？」

うっうっ

「特技、射撃・CQBとか？」

「あー、もう言わないで！」

「だから、諦めてー」

次の言葉を言う前に

「いや！軍隊だけは嫌」

首を勢いよく振る

「もう、わがままなんだから」

「誰のせいよ！彼氏には銃痕のせいで振られるし！ああー私の人生」
頭を抱える私

私の特技がもうひとつある

最近芽生えた未来視・・・とはいえないほどの

未来予測ができる事

ほぼ100%の確立で5秒後何をするのかわかる

これが私の強み

この特技が芽生えてからは、お母さんといえども

CQBに負けたことがない

(射撃には負けるけど)

「今日は、就職場所が決まるような気がするの」

心をときめかせたように、手を組み祈るような格好をする

「それも、未来予測？」

フツツと笑うお母さんなんてムシムシ

「いい！絶対につけてこないでよ！」

「あら、私がいつつけたの？」

白々しくとぼけるお母さんに

「一昨日の1131時ごろ・・・」

「あら。ばれてたのゝさすが私の娘♪」

「：もう、ちよつと出かけてくるね」

2階に行きパッパと着替え階段を下りて行く

「お夕飯には戻るのよ」

「はーい...」

そう、このとき漠然とだが就職先が決まる気がしていた

まさか、あんなところに入るとは思っていなかったが

注意書き

CQB (クロス・クォーター・バトル、近接戦闘、英: Close Quarters Battle)

は比較的に敵との間合いが短く、歩兵が主体となって行われる戦闘をいう。

プロローグ（後書き）

私の手相には『浮気をしやすい』という風に出ているそうです。
あ・・・それあつてるかも？

次回、なんでも屋 武道
期待しないで待っていてください。

なんでも屋 武道

ここが、今日の最良の地点のはず

はずなんだけど、なぜか今裏路地に居る

薄汚い場所の中から

あまり汚くない場所を探して壁に寄りかかる

クリーム色のコートに黒のフレアスカートとロングブーツを身に付けている雫はまるでいいし…自粛しよう

本当に、ここなのかな

自分の予感がだんだん疑心暗鬼になっていたときだ

爆弾が爆発したのかの音に彼女は振り向いた

普通ならびっくりして腰が抜けるだろう大音量だが、

彼女はびどうだにしない

私の未来予測だと、このビルの屋上から落下してきたはず

落ちてきた物に対し

覗き込む

「あなた、だれ？」

「…いってえ、アノヤロウブツコロス」

起き上がろうとするが、起き上がれない男

「手、貸しましょうか？」やっとの事で気付いた男は

「あ、あんた誰だ！すぐここから逃げろ」

逃げろって言われても

「お、ここに落ちやがったか」

もう手遅れです

バットや鉄パイプなど、いわゆるホホに傷を持ったヤクザさん

「お？お前の彼女か？」

「その人は関係ない」

あー、この人はネゴシエーターにはなれないな

『その人は関係ない』だと自分の彼女をかばうように受け取れるこの時は

『だれだ？その女、いつからいたんだ？』

ぐらい言わないと

あー やっぱり手遅れ

「やっぱ、お前の彼女か」みんな笑い出す

「はあ？こんな人が私の彼氏？冗談言わないで」

声を張り上げて言う

「なんだ違うのか」

「ただの通りすがりの一般民」

「ならよ、俺と付き合えよ」

私の間合いに完全に入る男

「あなたが、私と付き合うなら：少し近すぎよ！」

肩に触れていた手を捻ながら引っ張り足払いをするとあら不思議、

大男が風車の如く回転し地面に叩き落ちた

蛙が踏まれた様な声を上げ沈黙する

「今度から受け身習いなさい」

グリグリとブーツの踵で伸びている男のタップタップ腹（これって、今

話題のメタボってやつよね）

ポヨポヨと軽く踏むとスライムみたいに動く

「うあ！キモ楽しい」

（翻訳：気持悪いけど楽しい）

「兄貴！くそ！兄貴の敵」

短刀を鞘から抜き右骨盤に当て突進してくる

「面白いわね。でもそれだと！」

片足でふらつかないガッチリとしたバランスで短刀男の顔面前で止めた

相手には私の靴底が見えているはず

「その方法では自分の間合いに入る前に相手の間合いに入って殺ら

れるわよ」

ピクリとも動くことを忘れた男の短刀を蹴り足を下ろす反動で軸足で蹴り飛ばしまたその勢いで相手の横顔に跳び上段蹴りをしたらいい感じに吹っ飛んだ

や、やりすぎたかも

つつい、施設感覚でやってしまった

プロとド素人では役が違う

いつもの、捨て台詞を言って逃げていく
やっとなぜ我をおった男の介護に回れる

「大丈夫？」

壁に寄りかかる男を見る

無精髭がなければナカナカのハンサムだ

その時、なぜかホホが暖かくなり、彼をみていると
あー違う違う！

でも、まさかこれって

「家何処…」

「俺に構うな」

ムカ

「言いなさい！」

男の顔がこわばる

そして、男が言う前に

「分かったわ、禾生2—11—202ね」

「な、何で」

「何でも知ってるわよ、武道さん」

それが、武道さんと初めての出会いだった

なんでも屋 武道（後書き）

電車で揺られながら、書いたもののため、誤字あるかも。制作時間
1時間 あはは

巻き込まれた私（前書き）

遅くなりました。

巻き込まれた私

武道と言う男を肩で支えながら目的地に向かう

大の大人を支えるのは以外と難しいがコツさえ掴めば楽になる

「なんで、俺のことを」

クスッと笑い

「喋ると体力使うよ」

と、相手の疑問を流した

そう、私は悟った

きつと、この人が私のバディ（あいぼう）になる人だと

そして、事務所に着き戸を開けようとして私は止まった

「ねえ、金髪女性でスーツ姿の人に心当たりは？」

私の間に驚いた顔をする武道に

「知り合いなのね、中に居るわ」

肩から武道を放し戸を開けさせる

と

「武道ちゃん、おかえり（はあと）」

ここには、巻き添えを喰らうと分かっていたので離れて傍観する

「まあ、どうしたの！その傷！中に入って！汚いところだけど」

「俺の事務所だ」

「まあ気にしない。その娘もお入りなさい」

周りの気配を感じられる人なんだ

妙に納得しながら中に入る

「いてっ」

救急箱から消毒液をティッシュに染み込ませ擦り傷に当てていく

「男なんだから泣かない！でも」

私の方を向き上から下へ、そして、上へと舐めるように見る女性

「私、あなたどこかで見たわよ。どこかしら」

んー、と悩む彼女に

「アメリカ、オハイオ州ポーランド」

と私は答えた

年1回行く施設の場所

「そ、そうよ！あのときの、お、鬼教官！」

近接戦闘担当だった私は

一度この人を教えた事がある。

『久しぶりね、メアリ・グラハット』

英語で話す私

『お、おしさすぶるです！教官』

カミカミのメアリ

『あなた、CIAだったわよね』

『は、はい』

『もう、師弟子関係じゃないんだから、普通に。なんで武道と一緒に？』

『す、すみません』

『メアリ、私の特技。忘れた？』

『あ！』

『だいたい、分かったけど。武道じゃ無理でしょう』

メアリが武道を利用して、とある大手業界のトップメーカー取締役の裏資料をとってくると言う仕事

「よし、武道さん。私、貴方の助手になります！月給そうね16万でいいわ」

高卒程度の基本給料

「な、なにを馬鹿な」

「貴方に、拒否権はなし」

それに

「ここから離れた方がいいわ」

近くにあった鏡の前に行き、脇の下からP99を取り底部で殴り破る

「な、何を！」

そんな事にせず、破片の一枚を取り窓に

「1人か、」

メリアが武道さんが座っている前にあるワーキングデスクのしたを見る

そこには、C4が3つに起爆装置&赤外線が付いていた。

「あと4分」

爆破する時間ではなく、敵が突入してくるまでの時間

「いいえ、2分よ」

私が訂正した

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8709c/>

なんでも屋 武道

2010年10月10日00時46分発行